

口頭発表報告

東井義雄「第五の形」が持つ可能性

—現代に即応した学級経営の在り方をめぐって—

創価大学教職大学院 院生

三 浦 剛

I はじめに

現代の社会状況を鑑みたとき、世間はその混迷の度合いを増し、浮上する社会問題も深刻化の一途を辿る傾向にある。犯罪の凶悪化、低年齢化。世相を反映する三無主義（無関心・無気力・無感動）の横行。知識社会に伴う精神性の希薄化等、種々の問題を挙げればキリがない。

こうした問題の背景に存在する根本要因とは何か。本学創立者池田大作先生は、第34回「SGIの日」記念提言『人道的競争へ 新たな潮流』の中で、そうした社会状況・実情が存在することを概観した後、その問題の根本命題こそ「抽象化の罨」から脱することであると述べられている。

池田先生は、本著述の中で、人間の「貨幣」に対する際限のない欲望の根底には、グローバルマニズム（拝金主義）が存在することを示唆した上で、本来、交換価値しか持たない、抽象的・非人称的な貨幣が、人間世界を席卷することの脅威について言及されている。貨幣愛の横行により、本来主役であるはずの「人間」が、抽象的概念で括られることによって、無価値なもの、低級なもの、有害なものとして、駆除されるべき対象の位置まで貶められてしまうことを述べた上で、哲学者ガブリエル・マルセルが示唆する「抽象化の精神に対する休みなき執拗な闘い」の必要性を叫ばれている。それはすなわち、「具体性」に根ざした「人間」の復興をかけた戦いであると言えるだろう。

本教育研究大会は、テーマとして「人間の可能性を拓く一身近な足場から」を掲げている。創立者池田先生が提唱される“「人間」の復興”，教育分野における“人間主義の実現”を図る上で、「身近な足場から」いかにしてアプローチを仕掛けていくかが、論の焦点になるだろう。それは、牧口先生が歴史を俯瞰して導き出した「内在的普遍」へのアプローチと同質のものである。すなわち、身近の実体から識見を広げ、いかにして「善なるもの」を創造するかが、重要な鍵となる。

本件では、希薄化の一途を辿る「人間関係」をいかにして醸成するかを基調とし

て、教育の要衝となり得る学級経営について考えていきたい。焦点は、地域・学校・家庭の連携による「生活共同体の形成」をいかにして図るかである。子どもが、真に協同し合い、真に学び合い、真に成長していく環境を施していくためには、何が必要か。ここでは、三者が有機的に結び付いた学級経営の持つ可能性を、「現代に即応した学級経営の在り方」に照らして考えていきたい。

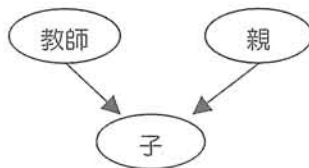
Ⅱ 東井義雄が示唆する関係性「第五の形」

教育者・東井義雄は、著作『村を育てる学力』の中で、親・子・教師の三者が味方同士として、どのように手を取り合っていくべきかについて言及している。

東井義雄は著述の中で、三者の関係性が「第一の形」、「第二の形」、「第三の形」、「第四の形」として存在することを示した上で、「第五の形」にまで高め、醸成していくことが必要であると述べている。

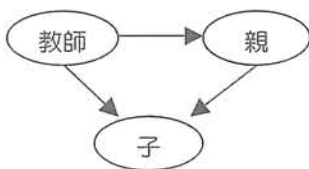
以下に「第一の形」から「第五の形」までを示す。

【第一の形】



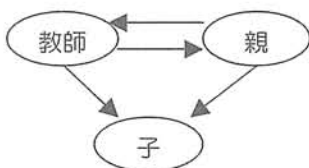
「この形の特長は、親と教師が、それぞれの立場でおたがいの連携なしに、子どもに立ち向かうところにある。」
→教師と親の関わりはなく、子どもに対して一方的

【第二の形】



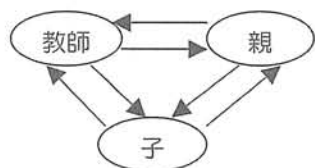
「これは、教師が主導的な立場に立って、親を教育し、子を教育する形である。しかし、この形は、教師が、親と子の自主性を無視してしまっている。教師がこんな思い上がった立場にいるようでは、村の教育は育たない。」

【第三の形】



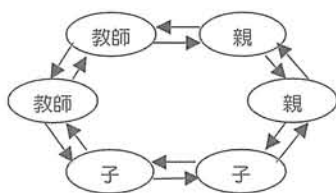
「この形は、ひょっとすると、ひねくれた子どもや、浮かぶ瀬のない子どもをつくるものになりかねないものをもっている」
→親と教師が協同することはできるが、ともすると子どもに対して一方的になり、子どもの視点に立って考えることが難しくなってしまう。

【第四の形】



「第四の形は、親と教師が、互いに尊敬しあい、磨きあうばかりでなく、子どもとの間にも尊敬と磨きあいを展開していく形である。」

【第五の形】



「第五の形は、親・子・教師が、単数のままで、尊敬と磨きあいを展開していくのでなく、一人一人が大じにされる形を残しながら、しかも、親が親たちとなり、子どもが子どもたちとなり、教師が教師たちとなって、その輪を広げていく形である。」

東井義雄は優れた実践家として、名を馳せた偉大な教育者であり、現実に埋もれ、荒廃した「村の教育」を再興していくために、様々な手を尽くし、その実現に尽力した教育者である。東井義雄は、村の実情を「一人一人が一人一人の城にたてこもろうとする傾向を強くもっている」と分析した上で、村の関係性を「第五の形」まで高めていく必要性があることを示唆していた。

彼は、村の教育力を高めていくにあたって「村にしあわせをうちたてるための要件はいろいろあるが、村に、好ましい人間関係をうちたてるということは、その要件の中の大じな一つだ」と述べている。あくまでも親・子・教師は味方同士であり、協同していくべき存在であり、その環境を整えることこそ「しあわせ」を実現する上で最も必要な条件であると示唆している。

現代の社会状況を鑑みれば、先述の通り、悲惨な実情が存在することは疑うまでもない。中でも、社会の高度な情報化や核家族化等の現象に伴って、「人間」と「人間」の関係が明らかに希薄なものになっているということは、文明の進展が招いた“負の遺産”であり、社会を深刻な方向へと導く一つの根本要因になり得ているのではないだろうか。ゆえに、東井義雄が指摘する点は、「人間関係の希薄化」が脆弱な社会を築く根本悪となってしまっている今日において、教育現場で適用し得る一種の改革論理として光を与えているのではないかと考えるものである。

したがって、教育の現場に「人間」を取り戻し、真なるものの「学びの構造」を再構築し、全ての者にとって「しあわせ」を実現していくためにも、東井義雄が説く「第五の形」をいかにして教育現場に取り入れていくかについて考えていきたい。

Ⅲ 「学級経営」との連動性

ここでは、「第五の形」を教育現場に実現していくために、「学級経営」が要する領域と、「第五の形」との相関関係について考えていきたい。

1. 学級教育の領域と構造

(1) 学級教育の領域

木原孝博氏の指摘によれば、学級教育を、①教科指導 ②特別活動 ③条件整備の三点に大きく分けることができるという。

同氏の指摘する所、教科指導の領域は、文科省「学習指導要領」や「学校教育法施行規則」で言われている「各教科」に対応する領域の指導を指している。この領域では、主に教授的方法に基づいて教授が行われ、科学的芸術的な認識能力が形成されるが、訓育も副次的に機能している。

特別活動の領域では、特別活動の考え方にきわめて近いことから、便宜上「道徳」もその一部として捉えられている。この領域では主には訓育が行われ、道徳性や市民性が形成される場所であるが、副次的には教授も行われていることを見落としてはならない。(図1参照)

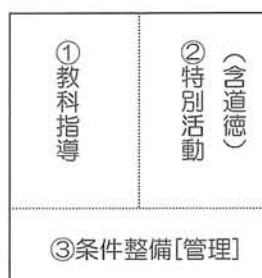


図1 学級教育の構造と領域

条件整備は、教科指導や特別活動を効果的に行うための条件づくりであると言える。物的な条件整備はもちろんのこと、人的な条件整備、人間関係的な条件整備の仕事が主要な課題となる。学級集団内のモラル、秩序と規律の確立、連帯感などである。これらが学級集団内に成立しているかどうかは、教科指導や特別活動の成否に深く関係する。その上で、木原孝博氏は、条件整備の在り方について、以下のように指摘している。

「条件整備の領域の指導とは、このような教科指導、特別活動を効果的におこなうためのものであって、それ自体の教育機能、人間形成機能はあまり期待されていない。ヘルバルト (J. Herbart) が教育作用を教授、訓育、管理の3つの分野に区分した時の管理に対応する領域である。」

氏が指摘するように、教科指導と特別活動の両面を有機的に結び付けての有益な学びに昇華させていく上で、条件整備は「管理」としての機能を持っている。ゆえに、この示唆から条件整備だけの学級教育は存在しないことが分かる。

(2) 学級教育の構造

ここで注意しなければならないのが、教科指導、特別活動、条件整備の互関性である。各領域は相互関連、相互浸透し合って有機的に働いている。条件整備の指導が有効的に行われれば、必然的に教科指導、特別活動は生かされる。その逆もまた然り、教科指導や特別活動が効果的に行われると、条件整備が一層充実するという結果をもたらすのである。したがって、三者は相互関連、相互浸透し合って存在していると言える。

学級教育は、こうした三者の有機的連関の構造を基にして成り立っている。では、学級教育がこのような構造と領域を有する中で、学級経営はどのような位置を示しているのだろうか。

学級経営の考え方は、大きく3つに分かれている。一つは、学級教育全体を含有する捉え方である(学級経営=学級教育論)。これは、教科指導、特別活動、条件整備全てを含めて学級経営と捉える考え方である。次いで、学級教育全体から教科指導を取り除いた考え方である(学級教育=「条件整備+特別活動」論)。これはつまり、特別活動と条件整備をその領域と捉える方法である。そして3つ目の形として、学級経営を条件整備のみとして捉える考え方がある(学級経営=条件整備)。教科指導も特別活動も含まず、条件整備のみに的を絞って学級経営を施行していく方法である。

2. 学級経営と「第五の形」の連関

上記項目では、学級教育の構造と領域、学級経営論の大体について述べた。では、「第五の形」は学級経営とどのように結びつくのか。本項では、その連関と可能性に迫っていく。

先述の通り、学級経営には3つの論理が存在する。ここでは便宜上、学級経営の在り方を「学級経営=『条件整備+特別活動』」と捉えて考えていきたい。下村哲夫氏の言葉を借りれば、「学級経営=経営主体活動論」と言い換えることができるだろう。ここでは「第五の形」を、学級経営にどう派生させていくかについて、「条件整備」と、「特別活動の領域」の二側面から言及していきたい。

(1) 「第五の形」と条件整備

「第五の形」を学級経営に生かしていくにあたって、論的となるのは「人間関係の醸成」をいかにして図るかである。無論、それは条件整備の在り方として考えるべきものであるだろう。先に述べたように、条件整備は様々な要因を含むが、物的条件、人的条件、運営条件と大きく分けて3つの条件が存在する。ここでは、「人間関係」という観点に的を絞り、人的条件としての機能に絡めながら考えていきたい。

アメリカの教育学者・タイディマン (Tidyman, W. F.) は、著作『授業の失敗の研究』の中で、条件整備の重要性について言及している。タイディマンは、教育内容についての研究をいくら深めても、また教育方法にいくら工夫を凝らしても、授業が失敗する時は失敗すると言明している。そして、その失敗の要因として「子ども相互の人間関係の歪み」と「教育の施設・設備の不備」、そして「教師の性格上の問題」(換言すれば、教師と子どもとの人間関係の歪み)を挙げている。条件整備の中でも、人的条件に焦点化して考えたとき、タイディマンの指摘は、「人間関係」の在り方そのものに、重きを置いていると言えるだろう。この点から、学級としての機能を有益に働かせるためには、人的条件の整備という側面において、人間関係の醸成が強く求められるのである。

しかし、タイディマンの指摘する所、人的条件の要件と云えど、事実上教師対子どもと、子ども相互の人間関係を問題としているに留まっている。東井義雄が提案する「第五の形」は、教師が教師たちとなり、子どもが子どもたちとなり、親が親たちとなって、互いに尊敬と磨き合いをしていく人間関係を指している。

ゆえに、「第五の形」を学級経営の上で現実のものとしていくためには、タイディマンが指摘する所の“人的条件の必要基準”を充たすことのみで満足することなく、「学級」という決められた枠組みから脱した「開かれた運営」、外へと開く「究極的な人的条件の整備」を実践していくことが求められるのではないだろうか。学級を越え、学年を越え、学校を越え、地域に家庭にと開いていく中で、学級経営の条件整備を図ることが、「第五の形」を教育現場に実現させていく手立てではないだろうか。

(2) 「第五の形」と特別活動

本項では、先述の条件整備としての在り方に加えて、「第五の形」を実現しゆくために、「特別活動の領域」をどのように捉え、どのように実践していくべきかについて言及していきたい。

学級経営を「経営主体活動論」(条件整備+特別活動)として捉える論者の典型に、細谷俊夫氏がいる。氏は「経営主体活動論」としての学級経営の捉え方について、以下のように述べている。

「学級は単に教授の立場からだけでなく、経営の立場からも論議の対象となる。ここに学級経営の問題が成立する。そして一般には学級論は教授の問題としてよりもむしろ経営論の対象としてより多く取上げられる性質をもっている。もちろん教授と学級経営との間の境界は必ずしも明確ではない。一般には学級における教師の活動は、教授を主体とする活動と経営を主体とする活動とに分けられる。したがって教師の活動から教授を主体とする活動を除いたすべての活動が学級経営の分野に含まれることになるのであって、その範囲はきわめて広く、学級に関するあらゆる問題がこれに関連をもってくる。」

氏が示す学級経営論の要件に「浪費の排除」がある。これは、学級経営にあたっての基本問題であり、具体的には、次の三つが挙げられている。第一に、有効な教授が行われるのに必要な物的施設を整備する問題である。これは、教室の構造や採光、教具、教科書等が挙げられる。第二に、教授を有効なものにするように生徒を訓練する問題である。これは、子どもに効果的な教授を行うための、慣習等の素地づくりを指している。そして第三に、教授そのものの中で行われる学級経営において、主として生徒の注意を教授に集中させる方策の問題が挙げられている。

こうして見てみると、「浪費の排除」は、条件整備としての観点に集約されていることが分かる。細谷俊夫氏のいう「浪費の排除」とは、条件整備の問題である。そして、そうした条件整備の在り方を示した上で、氏は特別活動がもつ可能性や特性を俯瞰して以下のように述懐している。

「教室は単なる教授のための場ではなくて、市民性育成のための実験室となり、教師は教科の指導者ではなくて、生徒の指導者となる。学級経営のこうした新しい領域が開拓されることによって、学級経営の概念は著しく変化していくことになる。いまや学級経営は教授に対して隷属的地位を守ることが許されなくなり、それ自身として重要な機能を果たさなければならなくなったといえよう。」

氏は、教科指導（教授）のみに重点を置いた実践に疑問を呈した後、特別活動の在り方やその実践方法によっては、学級経営という分野において新たな扉が開かれることを示唆している。これは、条件整備の充実を図り、特別活動の実践と有機的に結び合わせることによって、学級経営は著しく豊かになることを示していると言える。

したがって、「第五の形」を現実のものとしていくためには、条件整備において、千差万別な現場の実態に即して具体的なプランを組み立てると同時に、人間関係を醸成し「第五の形」が学級経営の上で、親・子・教師、三者を有機的に連動させた「コミュニティ」として成立するよう、特別活動の範疇から具体的な働きかけをすることが必要であると考えられるものである。

Ⅳ 特別活動が持つ可能性と学級経営との連関

今回教育課程が見直された中で、特別活動において注目すべき点は、全体目標と各活動・学校行事に、「人間関係の形成」という文言が新たに加わったことであるだろう。特別活動の今後の重点課題として、「望ましい人間関係を築いていく力」の育成が明示されたのである。

昨今、教育を取り巻く社会問題が議論的となっているが、実際の所、こういった問題を起点として「人間関係」が取り沙汰されるようになったのか。人間関係の形成という近々の課題に関しては、中央教育審議会答申（平成20年.1.17）の中で、以下のように指摘されている。

- ・学校段階の接続の問題としては、小1プロブレム、中1ギャップなどの集団への適応にかかわる問題が指摘されている。
- ・情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分な状況も見られる。

こうした指摘を受けて、渡辺邦雄氏は、特別活動の現代的意義について、次のように示唆している。

「このことは、これからの特別活動の指導に期待を寄せる社会からの要請の一端と考えてよいであろう。集団への適応に関する問題、対人関係を苦手とする若者の増加現象、マナーやルールに関する諸問題、集団や社会の一員としての社会的資質の問題など、児童生徒のパーソナリティーの変化がもたらした今日の教育課題に、特別活動が正対して応えることが期待されているといえる。」

ゆえに、近々の課題となっている「人間関係の形成」における諸問題と、現代的意義を要する「特別活動」は密接に結び付いていることが分かる。中教審答申の中でも指摘されているように、今日様々浮き彫りになる社会問題は、人間関係の希薄化や悪化を引き起こす要因になり得ている。都市化や核家族等に伴うヒューマンコミュニティー（人間関係でつながる地域社会）の崩壊、高度情報化社会に起因する仮想現実世界の増大と席卷。こうした事実が、子どもにとって“つながる”ための「場所」と「機会」を奪っているのである。「場所」と「機会」を奪われた子どもは、人格特性

の育成に多様な支障をきたしている。それは、三無主義の傾向や集団への不適応、自制心や規範意識の低下、集団や社会の一員としての自覚や責任感の不足、基本的な生活習慣の未確立、社会的問題行動の多発などである。こうした子どもの実態が存在することを受けて、渡辺邦雄氏は以下のように述べている。

「このことは、自他の存在・異質の他者の存在を確認し、相互尊重、相互信頼、相互扶助の重要性を理解したり、社会的存在としての自己を認識し、自らの相対的位置を客観視したりできる子どもの育成が重要であることを示している。(中略)

集団や社会の一員として持つべき社会的資質・能力・態度などのいわゆる社会性を育てていくためには、集団活動を特質とする特別活動において、まずは望ましい人間関係を築いていく力の育成が喫緊の課題であることを物語っているのである。」

氏が指摘するように、特別活動が「人間関係の形成」に貢献すべき範疇であるとするならば、学級経営における条件整備と連動させながら「経営主体活動論」として新たな可能性を見出していく中でこそ、「第五の形」を現実のもととして教育現場に打ち立てることができるのではないだろうか。

その上で、特別活動が学級経営の一翼を担って「第五の形」を生成しゆく可能性について考えていきたい。特別活動の範疇と云えどその領域は膨大で、近年に至ってはさらに肥大化の傾向を示している。その中で、「第五の形」を形成するにあたって最も効果的な実践方法として挙げられるのは「体験活動」の充実であると考え。「体験活動」が「人間関係の形成」にどのような影響をもたらすかについて、同氏は次のように言及している。

「望ましい人間関係の形成を図るには、他者と直接触れ合う様々な体験活動を行うことが必須条件となる。頭で考えた知識、理解、技能だけでは、実践的な人間関係形成力は育たない。体験と理論の往復によって、方法知の体得や概念の習得が次第に可能となるのである。体験とは自分の五感を総動員して、対象となるヒト、モノ（人、事象、自然）に直接働きかけ、臨場感ある中で対象から何かを実感し、物の見方、感じ方、考え方を豊かに発達させることである。人間関係の形成も生身の人間と直接触れ合う様々な体験を通して、よりよい人間関係を築く力や道徳性、社会性などを感得できるのである。『為すことにより学ぶ』特別活動の特質は、特に人間関係の形成においては有効に機能する。集団活動を通して様々な人々と出会い、交流し、学習する体験の場や機会を可能な限り設定することが、本課題の達成へとつながる。」

氏は本論で、特別活動を通して「体験」と「理論」の往還作業を施すことにより、子どもの人間関係形成力は育つことを述べている。すなわち、特別活動において「体

験活動」の充実を図っていくことが、「第五の形」につながる人間関係の形成を可能にする手立てであると言えるのではないだろうか。

V 「子どもたち」の世界の創造

「第五の形」を学級経営の上に実現していくためには、何よりもまず、学級内の条件整備をどう図るかについて考えていくことが必要である。「学級」という枠の中でどのような人間関係を形づくるかが、まず何よりも先に求められる要件であるだろう。すなわち、「子どもが子どもたちとなって、互いに尊敬し、磨きあい」をする人的条件の整備を図ることである。

「子どもたち」の世界を創造するためには、子どもを教師の「管理」下に置くのではなく、「経営の主体」として位置づけることが必要なのではないだろうか。大正デモクラシー下において革新的な実践を図った教育者・木下竹次は、学級を「一種の構成社会」とみなし、それを単なる教授の単位ではなく、学級の成員間の協力の下に社会生活を送る場ととらえていた。それはつまり、学級を「子どもが主体となって生きる社会」として考える学級経営論であるだろう。

1. 清水甚吾の学級経営

清水甚吾は、「学級を経営するものは学級の成員全体であるべき」であるという木下竹次の立場を踏襲し、学級経営の責任当事者は、「学級の成員全体」であり、その中で特に児童が主体的に経営に携わるべきであると考えていた。清水甚吾は以下のように語っている。

「学級経営の責任当事者は其の学級の成員全体である。特に私の考えでは児童の力による学級経営の進展と言ふ事を重く見たいのである。而かも特殊の児童でなく全員の連帯責任といふ事にしたい。随って私の学級では級長といふ者を作らない。どの児童も各其の能に応じて学級の為に働かせる事によって、自分ではできるものだといふ其処に自尊心が生じて人格が認められる。それと共に各児童が学級を愛し協同一致して学級をよくしようという念が強くと、彼等の自治心と責任感とによって、学級の進展を図り学級の成績を高めることができる。」

ここに明らかなように、清水甚吾は学級の構成員一人ひとりに役割を持たせ、主体的に関わらせることによって、学級を円滑に運営することを目指した。このような考えのもと、清水学級では、学級の構成員32名が4人ずつの分団に組織され、各分団が毎日交代で「学級当番」となって、学級の運営を担当していた。

また、この学級では、児童の希望にしたがって、「整理部」や「学芸部」、「図書

部]、「実験実測部]、「学習新聞部]などの「自治会部署]も設けられ、学級の運営に児童が主体的に取り組める構造を造っていた。

清水甚吾は学級内の「協同」に主要な観点を置きながら学級経営を図ろうと努めた。子どもたちの手で創り出す「自治」に託し、経営の主体として学級の運営に携わらせることによって、学級に対する帰属感や自発性、人間関係の形成を図ったのである。こうした側面を見るにつけ、清水学級の中で働いていた自治行動、すなわち特別活動の実践は、学級経営において「協同」という形で、人間関係を築いていくことに有益な効果をもたらしていたと言えるのではないだろうか。

2. 佐藤忠三郎の学級経営

「北方教育社」に加わり、生活綴方運動の普及とその研究に生涯を捧げた教育者・佐藤忠三郎もまた、学級に「協働精神」を取り入れ、児童を中心として学級経営を図った実践者である。佐藤学級における理想的な「級の生活」について、佐藤忠三郎は次のように語っている。

「先づ腹の底からの学級人となれ。学級が悪く言はれたから心から腹を立て、ほめられたから何事にも増して喜べる人間となる事が学級人としての第一歩だ。次に学級は二十七人がバラバラに集ってゐるのではない。皆で一つの世の中を作つてゐるのだ。そして各々が仕事を分担して住みよい、気持よい世の中を作りあげる事をいつも考へる。ここでは、協働を乱すブチコハシとマゼツカエシとアキラメとナゲヤリと無責任が一番悪い事をよく頭にたたきこめ。」

ここから分かるように、佐藤忠三郎は、協働精神によって、協力と連帯を中心とする理想的な学級の創造を目指していたのである。

また、佐藤学級の特徴は、学校外にもその活動の拠点を置いたことにある。この学級では、学級の「文集」や「生活新聞」の発刊、「子供図書館」の設置、佐藤忠三郎の下宿先で「生活の話・星座研究・月の観察・読書」を随時行う「夜の会」の開催、子ども同士の交流を図るための「土曜野球」の開催等を通して、子ども間の人間関係構築を実現しようとする独創的な学級経営を行った。

こうした学級経営は、子どもたちの目にどのように映っていたのだろうか。彼のクラスに所属していた「市郎」は、その学級の様子を次のように語っている。(『浜の子』第4号による 1936年4月発刊)

「良い所は朝学校へ来て教室へ入ると先づ皆がおはやうをしあふ事だ、朝の気持ちの良い時にお早やうを言ふと、学校へ来たといふ気持が起り、気持よく感ぜられる。又組々の人が互に教え合ふ事である。組の人が互に、にくみ合ふという事がなく、又自

分の級の人には、どんな事でも言ひ合って互に心持を分かり合ふことである。こんな事は言はれない、こんな事を言ふと自分が人におかしく思はれる等といふ事がなく思切って皆で話合ふので誰も気持ちよく話をする事ができる。又クラブの時のやうに皆が集まる時等自分は行きたくないなどといふ事がなく、よここんで皆が集るといふ事である。」

ここに書かれている事実は、まさに、佐藤自身が目指そうとしていた学級経営の姿そのものであると言えるだろう。課外での体験活動や、自治活動を通して子どもたちが組織化していく様子は、まさに「子どもたちの手による磨き合い」の世界の実現と言えるのではないだろうか。

VI 恩師の実践と「第五の形」

先の項では、主に「子どもたち」の世界をどう創造していくかについて述べた。本項では、自身が小学1年から3年までお世話になった恩師・伊藤悦也先生の実践を振り返って、「第五の形」の実現について考えていきたい。

小学校1年から3年までお世話になった伊藤先生の実践を振り返ってみたとき、思い起こされるのは、木下竹次が言うところの「相対的独自性」を持った色彩豊かな学級経営である。伊藤学級としての独自性、色彩は持ちながらも、他学級と、また学校全体と連動しながら、地域・家庭に開いた実践であったように思う。

伊藤先生の実践は、まさに「体験活動」を通した学級経営であった。冬、雪が降り積もった翌日には、ソリを片手に裏山へ。新緑がまぶしい春や緑が映える夏には、親子レクで山中へバードウォッチングに出掛ける。図工の時間に苦勞して作り上げた連凧は、親子レクで母親と一緒に揚げる。こうした機会を通して、教師と子ども間、親と子ども間の関係が結ばれるのはもちろんのこと、課外活動のあらゆる局面で出会う、友達の意外な姿、普段は見えない姿に触れることによって、子ども同士の仲が深まっていったことを鮮明に覚えている。

最も印象に残っているのが、県内規模の「子ども音楽コンクール」に学級独自で出場することを決めたことである。空いた時間を全て練習に当て、必死になって練習したことを今でもはっきりと覚えている。休日には親が応援に駆けつけ、とことんまで練習し抜いた。その中で、友達との間に本物の友情を築くこと出来、先生との間に大きな信頼が生まれ、家庭を越え、「親たち」となって支えてくれた両親が大きな心の拠り所になっていたように思う。

伊藤先生は個人的にも音楽に精通しており、保護者向けにもオカリナ教室を開き、教師たちと連携し合って、充実した機会を提供していたようである。

こうして考えてみると、教師と子どもと親は、それぞれの世界を構築し、相互に尊

敬し、磨き合うことによって、大きな肯定感と安心感を得られるように思う。伊藤先生の実践が学級の枠に留まることなく、地域・家庭へと開いていったからこそ、理想の学級経営が成り立ち、多大な効果を得られたのではないかと思う。「第五の形」を実現していくにあたって、山積する課題は目の前に存在するが、教師自身が胸襟を開いて、他と積極的に関わりながら、「生活共同体」としてその関係性を醸成していくことが必要なのではないだろうか。

Ⅶ おわりに

本論においては、課題となる点がまだ数多く残されている。また、こうした時代であるからこそ、「第五の形」を学級経営の上に実現することは容易なことではないだろう。しかし、人間関係が希薄化の一途を辿り、地域との結びつきが脆弱になっている今だからこそ、こうした努力が、強く強く現場に求められるのではないだろうか。

かつて東井義雄は、「百姓、ことに、谷間の百姓にとって田んぼはいのちに次ぐ大じなものである。……それほど大じな田んぼをつぶして、私の学校はじめ、村々の学校が建っている。……だがしかし、その学校が今まで行ってきたしごと、これから行おうとしていること……が、はたして、百姓たちの大きい犠牲に値するものであるかどうか」という問題設定をして、「足もと」をみつめることから教育の在り方を究めようとした。

今、こうした時代に立たされる我々も、「第五の形」をもとに「人間の回復」という、どこまでも身近な足場を踏み固めながら教育のあるべき姿を問い直していきたいと考えるものである。

参考文献

- 『村を育てる学力』東井義雄 明治図書
『東井義雄著作集』東井義雄 明治図書
『いのちの根を育てる学力 人間の回復』東井義雄 国土社
「第34回「SGIの日」記念提言『人道的競争へ 新たな潮流』」池田大作
「大正デモクラシー下における奈良女子高等師範学校附属小学校の学級経営の理論と実践について—木下竹次および清水甚吾の場合を中心として—」志村廣明
『北方教育社』同人、佐藤忠三郎の学級経営の実践について」志村廣明
「受容主義と学級経営論」木原孝博
「新学習指導要領に見る『人間関係の形成』に関する一考察—その背景、主な改訂点、今後の課題—」渡辺邦雄